

榎本あゆち著 『中国南北朝寒門寒人研究』

葭森 健介

一

本書の書名『中国南北朝寒門寒人研究』を一見する限り、専門性の高い、限定されたテーマを扱った著書のように受け止められるかも知れない。しかし、漢から隋唐への展開をどのように把握するかという中国通史上の重要な問題に関わる内容である。そこで先ず「南北朝」と「寒門寒人」という言葉に隠された本書の研究史上の意義を解き明かしたい。

魏晋南北朝は漢と隋唐に挟まれた分裂の時代である。内藤湖南はこの時代に成立した貴族政は唐代へと続き、科挙制度の整備等により宋に至り君主独裁の近世への変革があったと言う。以来貴族制研究は魏晋南北朝隋唐史研究の重要なテ

マとなってきた。ただ貴族制研究は、後漢末から魏晋の貴族制の成立から東晋南朝への展開についての研究と、五胡十六国から北魏、北斉、北周を経て隋唐帝国へのつながりの研究とに二分される。つまり、南朝社会と北朝社会の関係やつながりを具体的に考察する研究は多くなかった。後漢末から魏晋時代に成立した貴族制は東晋南朝時代に門閥化傾向を強め、梁末に崩壊する。結局南朝は北方の民族に起源を持つ北朝の北周に併呑され、北周を継ぐ形で隋唐帝国が成立したため南朝の何がどう隋唐へ繋がっていったのかが明瞭でない。隋唐の淵源については清朝の趙翼の「周隋唐皆出自武川」という指摘があった。これを具体化した陳寅恪氏の閩隴出身の政治軍事集団を隋唐帝国の基礎とする説が日中両国学界の共通理解となった。中国の田余慶氏は東晋の門閥政治は「暫

時」的「過渡」的なものであり、結局隋唐の皇帝による中央集権へと回帰したと述べ、唐長孺氏は隋唐初期には北朝の影響が強く、唐代中期以降になり文化や経済の面で南朝的要素が強くなったとする。唐氏は南朝化を「封建社会の発展法則に符合する必然的発展」と結論するが南朝は直接隋唐の成立に関わらない^①。日本でも川勝義雄氏、安田二郎氏、小尾孟夫氏、中村圭爾氏は著書に本来建康（今の南京）に都をおいた呉から陳までの諸王朝を指す「六朝」の名を冠し、越智重明氏も「魏晋南朝」研究と名乗り、南朝を魏晋貴族制の終着点とする^②。魏晋南朝史を隋唐にどう繋ぐのか、本書の書名に「南北朝」とあるのはこの難問に挑もうとする意思を示すものと思う。

榎本氏は論稿「南朝の寒人問題について」（『名古屋大学東洋史研究報告』四、一九七六）で研究活動を開始し、この難問を解く鍵は寒門寒人にあるとした。正史は寒門寒人を往々にして権力と不正な手段で結びついた「恩倖」と位置付ける。しかし、戦後の研究では彼らの個人的才能と経済力と「門閥貴族の弱体化、没落との関連の上でとらえられ」るようになる。氏は寒門寒人を研究することによって「門閥貴族制の没落を経験した南朝社会」が「どのように隋唐社会に接

続されていったのか」が明らかになると考えた。本書の序文でも「彼らは門閥貴族に蔑視されながらも次第に政治的軍事」的、さらには文化的力量を蓄え貴族層に対抗していった。その対抗・挑戦の歴史を考察することで、南朝社会がいかに次代の隋唐世界に影響したのかを問いかけようとするのが筆者の基本姿勢である」と述べる。つまり氏は、寒門寒人を手がかりに、南北朝を一体化し、東晋南朝から隋唐へのつながりを解明しようという問題意識を四十数年にわたって一貫して持ち続けて来た。それが「寒門寒人研究」という書名に表現されている様に思われる。

ではどの様にしてこの難題に立ち向うのか。序文とあとがきで恩師の谷川道雄氏、先輩の安田二郎氏の研究がてがかりになると述べる。両氏は門閥貴族制を克服し、次の時代へと続く方向性を探っていた。谷川氏は川勝義雄氏と共に豪族共同体論の提唱者である。川勝氏は後漢末の郷里社会と士大夫層の郷論の關係から魏晋貴族制の成立を説明し、谷川氏は北朝における士大夫が郷里社会との關係の中から生み出された賢才主義が貴族制を再生し、隋唐へと続く指摘する。ただ東晋南朝では川勝氏が述べたような郷論によって貴族が支えられるという社会構造も、谷川氏が指摘したような郷里に根ざ

した賢才主義や貴族自身の革新も見いだせない。そこで榎本氏は南朝豪族・土豪層ら寒門の擡頭、遅れて江南にきた北来豪族の望族的あり方、個人能力（才学）主義への回帰について論及した安田氏の研究に注目する。ただ、安田氏も江南社会から生み出された南人の寒人を積極的に取り上げていないと言う問題が残る。となると①江南社会から寒門寒人がどの様に生み出されたのか、②寒門寒人の個人能力（才学）主義・賢才主義の実像、③南朝と北朝、さらには隋唐とどうつながっていったのがポイントとなる。所収の諸研究は書かれた時期が前後しても、テーマには一貫性がある。そこで、以下執筆年次や章立てにとらわれず、この三点の課題にどの様に迫っていったのかを考察することで、書評としたい。

一一

氏はあとがきで具体的な南朝寒門寒人の「動態・その内面にまで立ち入った政治史的研究については、今日、残念ながらそうした方向にはなかなか向かっていないようにおもわれる」と述べている。第一編の「南朝寒門寒人研究」はこの問題意識に基づく南朝の寒門寒人について書かれた論稿がまと

められている。

第一章の「梁末陳初の諸集団について」は氏の研究の出発点である。陳霸先は嶺南で少数民族の平定に当たっていた江南出身の土豪將帥層及び嶺南・南川地域の土豪を結集して挙兵し、梁末の混乱を収拾して南朝最後の陳朝を立てた。同時期に起こった諸集団も同じく寒人・寒門武人出身者が中核となっている。こうした集団に特長的なのは任侠的な保護―従属の關係によって成り立っており、それは在地に根ざす生活集団としての性格を持つものであると述べる。後漢末に郷論を生み出した社会構造とは異なるものの、同じ共同体的性格を持つ關係が寒門・寒人を核として、門閥貴族制社会の崩壊を乗り越え、南朝最後の王朝を生み出したとする。この陳霸先が健康へと向かう起点としたのが南康地方であった。当地で民衆運動と深く関わった水上交通者の東晋末から梁末までの動向を分析したのが第二章「東晋・南朝の民衆運動と水上交通」である。東晋末の盧循も陳霸先も嶺南から大庾嶺を越えて贛江、長江を下り、水路健康を攻撃した。その際に必要になるのが、造船の技能者、船材となる木の伐採者、水運に精通した操船者である。嶺南や南康は越や溪蛮等少数民族の住む土地であり、氏は地理書や志怪小説の記事等を用いて彼ら

が船材の伐採、造船、水上航行に関わったとする。彼らが在地勢力に率いられて、盧循や陳霸先の集団に参加したのではないかと指摘する。つまり東晋末の反乱、陳朝の成立の背景には少数民族をも含む在地社会の民衆と盧循や陳霸先のつながりがあったことになる。梁末に軍事面で主導権を握ったのは土豪將帥層であるが、東晋では華北から江南に移ってきた貴族層が軍団の頂点に立っていた。彼らを排除しないことには寒門寒人の擡頭はありえない。川勝義雄氏はその貴族層が軍事権を失ったのは晋宋革命で、宋の武帝となる劉裕等の北

府軍団の寒門武人が、貴族層から軍事権を奪って南朝を立てた時期という。しかし、榎本氏は第四章「南朝貴族と軍事」で南朝に入ってもまだ有能な門閥貴族に軍事を担わせ、地方の軍府を統率させる事があったと指摘する。その代表が宋末から南斉にかけて、江州、雍州の軍団を率いた名族琅邪王氏の王奐である。王奐は宋末諸王の反乱の鎮定軍の幕僚として才能を発揮し、江州軍府の中央軍への再編の功績により中央の領軍將軍となる。その後、南斉武帝は中央による地方軍団の統制を強化すべく王奐を北魏との国境の拠点雍州に派遣する。後に王奐は雍州軍府内の対立から幕僚を殺害し、事件の糾明に來た皇帝宿衛軍と交戦し殺害される。これを最後に貴

族が軍団を率いることはなくなり、軍事権は完全に寒門武人に移る。東晋では地方軍団の全権を握った貴族が自立し、中央政府に対抗したが、王奐は皇帝によって才能を評価され、地方に派遣されるという点で違いがある。

南朝で活躍した寒門寒人は江南の土豪層ばかりではない。華北から遅れて江南に渡った晩渡の士人も門閥貴族から寒門寒人と見なされる。さらに、寒門寒人が果たした役割は軍事面だけではなく、學術、文化面にも及ぶ。第三章「劉孝標をめぐる人々」では山東省北部三齊地域の出身者で、『世說新語』の注を付け、『類苑』の編纂に関わった劉孝標（劉峻）とその周辺の人物が取り上げられる。南北朝の国境は緯度で区切られるものではない。南朝の宋は東シナ海沿いに江蘇省の北部から山東省にかけて領土を確保し、三齊地方は宋と北魏の係争地となった。その結果三齊豪族の中には北魏の戦争捕虜として北辺に連行され、監視下に置かれる者もいた。劉孝標もその一人で、仏典の書写などで生き延び、苦学して秀才を育んだ。後に南斉武帝の働きかけにより劉孝標及びその一族も南斉に帰還する。南斉では蔵書家で三齊豪族の崔慰祖の知遇を得て、秀才を開花させる。その後慰祖の従兄崔慧景の下で參軍となる。だが崔慰祖、慧景は共に悪童天子東昏侯

をめぐる混乱の中で非業の死を遂げた。これを見た劉孝標は政治でなく、学問の才能で生き残る道を選択した。『世説新語』の注、『類苑』の編纂はそうした中で完成されたものといえる。すなわち、劉孝標達寒門寒人が学才で生き抜く姿は賢才主義を表すものと言えよう。

二二

中書舎人は皇帝と諸司との取り次ぎ役で、官位は高くはないが皇帝の側近として重要な役割を担う。寒門寒人が中書舎人として皇帝の信任を得て権力を握ったことから、正史は彼らを「恩倖」と評してきた。しかし、安田二郎氏はこの寒門寒人の個人の才能を活かした身の処し方を新しい動きと評価する。そこで、第二編の「中書舎人研究」ではこの南北両朝の中書舎人の役割と就官者を分析し、その実態について論じている。

第五章「梁の中書舎人と南朝賢才主義」は榎本氏が第一章の次に手がけた研究である。梁代初期と中期以降の時期に分けて中書舎人の就官者を分析すると、初期の多くは学才が認められて登用されており、所謂「恩倖」ではない。その才学

は勿論実務的能力もあるが、礼学の知識も重要視されていた。すなわち礼学は貴族としての体面を保つ上でも必要であり、国家制度を整える上でも機能する。そうした人物を周辺に配置することで武帝を中心とする体制が成立する。ただ、中期以降、武帝の政治姿勢は弛緩し、中書舎人の中には朱异の様に権力と富を追い求めるグループも出現する。そこに川勝氏が指摘した国家側から発給される良貨と民間の悪貨という貨幣の二重構造が加わり、商人出身者が中書舎人に接近して門生となる。その結果、南朝の賢才主義は十分に展開することがなかった。ただ裴子野や顔之推の様に才学主義を次代へと引き継ぐ者も現れた。

唐代の中書は詔書を起草し、宰相としての地位に至るが、南朝では貴族の就く中書侍郎と中書舎人の間には大きな格差があり、才学があっても低く見られていた。北朝の賢才主義、中書舎人について考察することでこの壁をどの様に越えて行ったかを明らかにする必要がある。谷川氏が北朝の士大夫の日常生活や官僚としての倫理性に重点を置いて賢才主義について述べたのに対し、榎本氏は第六章から七章で北魏、東魏、北斉、西魏、北周の中書舎人や御正という皇帝側近の実務官僚の賢才主義に注目する。第六章「北魏後期・東魏の中

書舎人について”では北魏の孝文帝期から東魏にかけての中書舎人を取り上げる。孝文帝期に単なる皇帝の意思伝達者であった中書舎人は北魏末の孝荘帝の時代に皇帝の顧問官・側近の地位に上昇する。その過程で中書舎人の就官者は寒門寒人のみならず、門閥貴族まで含む様になり、戦場の指揮官、皇帝顧問、後見、擁護者としての役割までも果たす。さらに中書舎人は皇帝個人だけでなく士人相互の輿論・評価により学才・文才が認められた者も加わる様になってくる。東魏を受けた北斉の中書舎人が南朝とはどの様な異同があるのかをふまえ再検討したのが第七章「北斉の中書舎人について」である。北斉初期文宣帝時代の中書舎人に特長的なのは北族や北族化した漢人を含み、軍事面で功績を挙げていることである。これに比べ後期の廢帝から後主に至る時代の中書舎人は貴族から寒士までの様々な階層を含み文学顧問的色彩を帯びる。中書舎人任官者の多様性の背景には中書舎人が兼官化し、皇帝側近の中書の役割が重視される様になった事がある。当然こうした役割を果たす上で個々の才能が求められた。さらに文才に優れた侍詔分林館の人士が中書舎人を兼ねたことで寒士の政治的発言力が増し、学才の持つ意味が重みを持つ。こうして賢才主義は伸張し、中書の権限は強化され唐代の中

書の地位向上へとつながって行く。北斉に対し北周では中書舎人と言う官職はない。胡三省は御正が中書舎人に相当する官職とする。第七章「西魏末・北周の御正について」では北周の御正に注目し、皇帝側近の内史・御正と北斉の中書舎人を比較し、さらには唐代の中書との連続性について考察する。御正には上大夫・中大夫・下大夫があり、明帝期までは高位の武官や高門の子弟が就官した。その背景には彼らに天子を文武両面で補佐させ、その影響力を利用して、権力者宇文護や皇帝自身が自己の権力基盤を固めようとした意図が窺える。武帝即位後は高位の武官の他に学識があり、儀典・礼学・経学等学問全般にわたって顧問を務めた者も御正になる。武帝の親政の下、若い世代の貴族や北斉や梁からの戦争捕虜で武帝から文才・学才があると評価された者も御正に加わる。これらの御正や春官系内史の就官者の中から隋初の官界を支える官僚群が生み出される。北周の御正は地位が高く、高位の武官も任用される点、詔勅の起草にはほとんど関わっていない点で梁や北斉とは異なるものの、文才・学才によって評価された者が御正に就官した点で同じく賢才主義的傾向が認められる。さらに、皇帝の側近の者の地位が高まることは唐の中書の権限強化につながるものと考えられる。

つまり、南朝でも北朝でも文才・字才に優れた者が皇帝の周辺に集められたことは、南北朝で賢才主義への流れが強まってゆくという傾向を示す。ただ、その南北朝両者はどのようなルートでどの様な人々によって繋がっていたのか。すなわち、南北の境界を越える「越境者」の実態が明らかにされる必要がある。

四

梁末の混乱以後に南朝から北朝へと移動した顔之推については宇都宮清吉氏及び吉川忠夫氏、同じく庾信についても吉川氏の研究がある。³⁾榎本氏が第三編「南朝帰降北人研究」で取り上げたのはそれ以前に北朝から南朝へと移った越境者、とりわけ蘇北から三齊地方にかけての在地勢力、北魏によって当地に派遣された武人である。

第九章「帰降北人と南朝社会」では梁の時代に北魏との係争地である彭城（徐州）、漢中、さらには嶺南で軍功を挙げた帰降北人の蘭欽の出自や南朝に降った経緯等について検討する。氏は先ず蘭氏一族の出自について考察し、蘭氏が鮮卑系の北人であると指摘した。中でも蘭欽は慕容氏に付き従っ

た一族で北魏南辺の城民として暮らしていたのではないかと推定する。蘭欽が梁に降った時期は北魏末の城民の乱が起り、北魏の南辺も混乱に陥っていた。さらに蘭欽がいたであろう山東半島の南部から江蘇省北部の地方は、江南と海上交通で深く結びつき、貨幣流通経済の影響を受け、当地の州鎮長官らの商業、収斂行為によって城民・兵士の生活が脅かされていた。蘭欽の帰降の背景にはこうした状況があったとする。第十章「南斉の柔然遣使 王洪範について」では南斉のはじめに北魏と対立する柔然への使者となった王洪範について述べる。王洪範の本籍は『南斉書』が齊郡臨淄県、『南史』が上谷郡と記載を異にする。王洪範の先祖は上谷の護烏丸校尉の管轄下の烏丸鮮卑で、その後北魏南辺防衛のため淮北に派遣された可能性が強い。北魏南辺の胡族の兵の地位は徐々に低下し、王洪範も待遇の不满から南斉の北辺の蕭道成の軍団に服属し、後に建康の近くに僑置された齊郡臨淄県に所属したのでないかと本籍の矛盾について説明する。王洪範が柔然への使者として選ばれたのはこうした事情があったと指摘する。また、彼の妻は三齊豪族の清河崔氏の娘で蕭道成の挙兵以来南斉の軍団の基盤となっていた三齊豪族と密接な関係にある。それ故彼は三齊豪族の一翼を担い武帝期から明帝期

にかけて南北朝の国境地帯で軍事的に重要な役割を果たした。三齊豪族はもともと在地の人々に対し安田二郎氏という「望族」として接してきたが、後に財を媒介として皇帝と結

びつき、贓賄行為に走る様になってきた。しかし王洪範は帰降北人としての武人としての才能と異域に対する情報によって生き抜いたとする。第十一章「侯景の乱前史」は侯景が反乱を起こす前夜の南北朝国境の最前線寿春の状況から帰降北人、蛮、在地豪族の動きを分析する。寿春は淮水の支流の淝水に面する南北が衝突する重要戦略拠点であり、前秦や北魏にとつては江南攻撃の、南朝にとつては北伐の拠点となる。従つて、南北両朝のその時々々の政治・軍事の状況により両朝の軍隊が交互に進駐する不安定な地帯である。加えて寿春には三齊等の華北から移住してきた豪族や在地の豪族などが居住し、淮水上流には蛮が生活するという重要であるが複雑な土地柄であった。東晋から劉宋までの北伐の主力は京口に位置する所謂北府軍であった。しかし、劉宋末の晋安王子勛の反乱以降、寿春に位置する軍団の役割が増大する。梁代に北魏が寿春を支配すると、寿春の攻防戦や北伐は帰降北人と寿春在住の豪族勢力に頼らざるを得なくなる。梁の武帝が北人の侯景の帰降を受け入れた背景には、北魏の混乱に乗じ、侯

景らの北魏南辺からの帰降北人や寿春の三齊豪族力を利用して華北の奪還を図ろうとしたことが想定される。

つまり、南齊から梁にかけては北からの越境者である帰降北人、三齊豪族が軍事的に重要な役割を果たし、対北魏戦争の先頭に立っていた。本書に収められてはいないが榎本氏はこの越境者について「崔慧景宛崔僧淵返書について」(『名古屋大学東洋史研究報告』四三、二〇一九)と言う論文を書いている。これは南齊の三齊豪族の総帥的立場にある崔慧景が北魏に留まる崔僧淵に対し南朝への帰順を促す手紙への返書を詳細に分析したものである。この書信はたんなる返書ではなく、孝文帝が行った漢化政策等を南朝側に知らしめ、彼らの北魏への帰順を促すプロバガンダでもある。そこには孝文帝が漢化政策を通じ南朝の漢人士大夫に対しても中華の皇帝としての正当性を示す意味合いがある。この様な手紙の往来や仏僧を利用した三齊豪族のネットワークにより、南北間の情報やりとりがあった。こうした情報を基に三齊豪族は自己の去就を判断したのではないかと述べる。越境者の実態と役割については本書第三編と共にこの論文も参照して頂きたい。

五

隋唐時代の歴史家は南朝をどの様に評価していたのであろうか。門閥貴族社会が崩壊した梁朝の歴史を記した『梁書』、『南史』はどちらも唐代初期に編纂された書物である。その内容を比較分析することで、南朝に対する編纂者の思いを探ることが可能である。こうした問題意識で書かれたのが第四編「南朝関連史料研究」である。

第十二章「姚察・姚思廉の『梁書』編纂について」では『梁書』が『南史』に対し記載が簡略であることの背景から『梁書』を編纂した姚察、姚思廉父子の梁朝への思いをくみ取っている。特に『南史』と『梁書』の差異が顕著な臨川王蕭宏伝の記事を比較し、『梁書』には「美書惡諱」、善いことは書き悪いことは省くという姿勢があるとする。『南史』が説話的な記事を用いて醜聞とも言える話を加えているが『梁書』にはそうした記事がなく、蕭宏の失態により処分された官歴について本伝では隠すように簡略化されている。その背景に梁代の姚氏がおかれた立場があった。つまり、姚氏は江南の呉興（湖州）の出身の寒門で医術によって士大夫の社交

界に入り、臨川王家とのつながりで起家した家柄である。梁代後半になると寒門寒人が賢才主義や士大夫の才能の評価によって官界に進出する機会が奪われ、姚氏も臨川王家を頼り、官職を得た。その恩義が『梁書』の臨川王伝の「美書惡諱」を生んだのではないかと推測する。第十三章「南史」の説話的要素について」では『南史』がなぜ説話的要素を盛り込んだのかに踏み込む。『梁書』と『南史』の梁諸王伝を比較すると『南史』には諸王の官米の横領、蓄財、蓄兵、奢侈等の私生活、さらに暴虐性を物語るエピソードが多く記載される。これらは民間に伝わる噂話、すなわち説話、小説をふまえた記事と思われる。つまり姚氏父子が梁の滅亡について武帝を取り巻く側近の罪に帰すのに対し、『南史』の編纂者李延寿は武帝の寛縦な政治と諸王の反道徳的行為に起因すると認識した。顔之推の志怪小説『冤魂志』の中にも梁の廬陵王の残虐行為の話が載る。また、南北朝時代の皇帝・諸王・名士の言動が記された『談藪』は顔之推のような南朝の北渡の士人や北斉の士人が加わる談論の場で交わされた話を基に成立した。李延寿の『南史』の説話的要素はこうした談論の場を背景にして書かれたのではないかと述べる。第十四章「再び『南史』の説話的要素について」では武帝の父蕭順

之についての記事を手がかりに前章が補強される。南斉武帝の第四子蕭子響の反乱の鎮圧に当たり、蕭順之は子響を快く思つてなかつた太子蕭長懋の意を受け、子響を捕らえて弁解の余地なく殺害した。『南史』は子猿の死を悲しんだ母猿を見た武帝が子響を思つて泣くのを見て、順之は恐れおののき病になり死去したという逸話を載せる。これは武帝の死後一族の蕭鸞が武帝の子孫を排除して皇帝に即位したのを蕭衍が支持した理由を暗示すると共に、南斉が宗室内部の凄惨な骨肉の争いで自滅する姿を描いている。李延寿は『北史』でも北斉の宗室内部の争いに関する志怪小説的説話を載せている。『南史』『北史』の説話的要素は顔之推等南朝出身者も含む談論の場で交わされた情報により、南北朝を批判的に回顧する目的があつたのではないか。それは隋唐の皇太子の廢嫡や玄武門の変などの宗室内部の抗争に対する李延寿の諷諭ではなかつたのかと述べる。

六

榎本氏は正史を表面的に読むだけでは見えてこない、その裏に隠された歴史事象を解明しようと、地理書や志怪小説等

の資料をふんだんに引用し、傍証している。その結果、従来見えて来なかつた寒門寒人の姿を通し、南朝と北朝の關係、南朝から隋唐につながる経路等を明らかにした。「迷つたらあゆちさんに聞こう」、評者も含め名古屋大学東洋史研究室の後輩の間で史料解釈や研究方向が行き詰まった時に榎本氏にたよる風潮があつた。榎本氏は時代背景をふまえ全体像を見通す洞察力と抜群の史料読解力と解析力で一目置かれる存在だつた。本書にはこうした氏ならではの力量が十分に發揮されている。

また本書では国内外の多くの研究成果が随所に引かれ、その目配りの良さにも驚嘆される。さらに実証過程の各部分にも新たな知見が示されている。また、魏晉南北朝隋唐を中国の中世と位置付け、豪族の台頭、門閥貴族の没落を目の当たりにし、学問の重要性を伝えた顔之推に目を向けた宇都宮清吉氏の研究、宇都宮氏に学び共同体論を打ち出した谷川、川勝両氏の地域社会と士大夫層の繋がりを重視する研究、南朝に於いて望族的あり方や賢才主義に迫つた安田氏の研究が本書の底流にある。すなわち、宇都宮、谷川、川勝、安田各氏が積み重ねてきた南北朝隋唐を一つの時代として捉え、位置づけようとする発想を継承し発展させるといふ基本姿勢に貫

かれていることも忘れてはならない。

とはいえ、本書の内容をさらに深めてゆくには、北朝隋唐社会における南朝の要素の具体像、南北朝の寒門寒人の流れを汲む士人が隋唐でどの様な活躍をしたのか等、さらなる難問が立ちはだかっているように思われる。いかに目配りのよさと抜群の資料読解力を有する榎本氏であってもこれをすべて解決するのは至難の事である。

本書は南朝と隋唐を繋ぐという難問に立ち向かう上での道しるべ、問題提起とも言える。次世代の研究者がその問題提起を受け継ぎ、発展させて行くことを願ってやまない。

注

- (1) 陳寅恪『唐代政治史述論稿』(一九四四、商務印書館、通行本は一九五七年、生活・読書・新知三聯書店版)、田余慶『東晉門閥政治』(一九八九、北京大學出版社)、唐長孺『魏晉南北朝隋唐史三論』(一九九二、武漢大學出版社)
- (2) 川勝義雄(『六朝貴族制社会の研究』一九八二、岩波書店)、安田二郎『六朝政治史の研究』(二〇〇三、京都大學學術出版會)、小尾孟夫『六朝都督制研究』(二〇〇一、溪水社)、中村圭爾『六朝貴族制研究』(一九八七、風間書房)、越智重明『魏晉南北朝の政治と社会』(一九六三、吉川弘文館)等以下の研究書については榎本氏の本書注参照。

- (3) 宇都宮清吉『漢代社会經濟史研究』第一章、第二章、第十一章(一九五五、弘文堂)、『中国古代中世史研究』第九章、第十二章(一九七七、創文社)、吉川忠夫『侯景の乱始末記』(一九七四、中公新書、志学社選書として二〇一九再版)

(よしもり けんすけ 徳島大學名誉教授)
(汲古書院、二〇二〇年十月、A五版、四七一頁)